
黒竜の雛

守野 梅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒竜の雛

【Zコード】

N7413F

【作者名】

守野 榆

【あらすじ】

新学期が始まったばかりの大学生・進藤匠は、いつものように“日常”を経験していた。だが、彼はある日突然、“非日常”的世界に投げ出されることになる。人の魂を鬼火に変え、己の体内へ取り込む謎の男、フェスに襲われたのだ。匠の“日常”生活は終わりを告げた。しかし、同時に彼の前に一人の少女が現れる。少女はフェスから匠を守るため、彼のそばで生活を始めるというが…、魂と魄をめぐる、奇妙なソウル学園ストーリー！

プロローグ

その日。

その日も、進藤匠しんじゅうたくみは当たり前に自分の日常を経験していた。大学一年の四月末、新しい環境にもそこそこ慣れ、将来について真剣に考える時期もはるか向こうにある。友人も何人かできた。

家庭はごく普通。（この場合、当人が普通だと思っていても実は、他人からしてみれば、普通でない場合が多い）ふたり兄弟で、親はいる。

しかし、今は妹がホームステイ中で、母親と一人暮らしだ。

成績は中学の時から、中の上下を行ったり来たりしている。自分を磨こうと思うほど気概はない。しかし、急け過ぎても恐いので、適度に努力する。

そのせいか、微妙に要領がいい、と中学以来の友人である学まなぶに言われたことがある。

彼女はいない。

隣の席の多田美穂ただみほに何くれとなく話しかけてはいるが、これは彼女に宿題等の援助をしてもらうためで、それ以上深くは考えていない。最近は、焦つて探すこともないと思っている。

以下の悩みは、迫るゴールデンウィークのお金の使い方ぐらいだろうか。

いつもの友人たちとどこかに出かけるのもいいけれど、買いたいゲームやマンガもいくつかある。その日の放課後に、市街地に足を向けたのも、ゲームと本を物色して、そのあたりの日星をつけようと思つたからだった。

この時まで、彼にはそんな日常がいつまでも続くものだと思っていた。

いや、そんな自覚すらなく、ただ単にこれが世界のすべてだと思いこんでいただけなのかもしれない。

血のように淡く光る夕焼けの中で、匠たくみの生活はあまりにあっけなく燃え尽きたのである。

あるいは正確には、燃え上がったのかもしれない。

まるで竜がより高みをを目指して、飛翔するかのよう

第2話 外れた世界

学校から出ると、匠たくみは一人、校舎前の停留所から市街地行きのバスに乗った。

このバスに乗るようになつてから、ちょうど一年一ヶ月が経過したことになる。

すでに見慣れた窓の景色に田をやりながら、匠はひととき回想に沈んだ。

最近、ひどい耳鳴りに悩まされている。

耳鼻科にも行つたが、原因はわからないという。

一種のストレスによるものと医者は判断したが、匠自身はそれに納得していなかつた。

ストレス？

このおれが？ ありえない。むしろ、なさすぎて困るくらいだ。大学での生活は、案外そつけないものだつた。朝から夜まで研究の毎日だと思っていたのは、まちがいで、へたをすれば小学生低学年並みにやることがない。

二年だから暇なのかもしれない。三年では、それこそ学科へ分属される年だ。きっと、今よりおもしろいにちがいない。

そんな淡い期待を胸に抱きながら、匠は繁華街に差しかかつたバスの外を眺めた。

いつ来てもにぎやかな場所だ、と思う。

そこに流れる空気は一種、独特なものがあつたし、人々を引きつける何かがあると匠は信じていた。

バスが目的の場所へ到着し、乗客がそれぞれの目的地へと旅立つていく。

大きさかもしけないが、実際、そうなのだ。

匠もゲームの聖地、「パラダイス・オブ・ゲーム」を目指す。

これは店の名前で、こんなふざけた店名でよくお客様が入るな、と思

いながらも、そのイメージのインパクトからか、密足に困ることはないさそうだった。

「またか…」

ひどく耳鳴りがしている。耳をふさいでも止まることはない。体の内側から発せられる音だらうから、止まらないのは当たり前だが、よくもこんな振動が身体から発生するものだと感心する。工事現場の振動とも似つかないそれは、まるで巨大な生き物がこの街を徘徊するがごとく、空気中の分子を震わせていた。はつきいって耐えられるものではなかつた。

気にしだすと、震音は一層の激しさを持つて、匠の体に襲いかかる。

「へそ、今日は一段とひどいな…」

まともに歩くこともできなくなり、そばにある街路樹にその身を預ける。

ちからがぬけ、その場にどすつとすわりこんだ。街路樹の下はちょうど日陰になつてあり、これでこそしは楽になりそつだつた。

「大丈夫…？」

匠が見上げると、学校帰りらしい少女が心配そうにこちらを見つめていた。

「いや、大丈夫ですよ。ちょっとつかれただけなんで…」

いまだき、見知らぬ他人を心配する少女に頭が下がる思いだつたが、匠は本当の原因については言わずにおいた。言つても、彼女はその対応に困つてしまつだらう。

「だれも気づいていないのか…」

「は？」

匠はいま聞いた言葉を疑つた。いや、正確にはそれを発した人、にだ。

「君は、聞こえないのか？」

（え？ なにが…、といふか、男言葉…？）

彼女の大人びた様子に、内心どぎまぎしながらも、匠は平静を装つて答えた。

「いやー、ほんとうるさいよね、町中つて。でもおれはもう大丈夫だから、心配しなくていいよ、つてあれ？」

最初は何が起きたのかわからなかつた。

ただ、日中であるはずのいまが、突然、暗闇に変わつたことをのぞいては、

「はじまつたか…」

彼女と思われる人物がつぶやいた。真つ暗闇で何も見えないので、たしかではないが、そのおとなびた声色から彼女であると思われた。

「どうなつてるんだよ、これは…」

皆既日食か、それとも、月食か？

でも、そんなこと一コースで言つてなかつたぞ…。

それとも、予期せぬ隕石接近か？　大停電か？

それとも、や

っぱりテロか？

考えられる可能性はいくつもあつたが、そのどれもが現実味を持たなかつた。

「案山子だ」

「かかし？」

聞きなれない言葉を耳にして、匠はおもわず、口の中で反すうした。

「知つてゐるとは思つけど、人に見せかけてカラスなどから煙をまもる、あれだ」

(…………、うん？　　)

なにをいつてゐるのだろうか？　冗談でも言つてゐるつもりなのだろうか。

それならば、いやおうがなんでも返答しなければ、失礼といつものだろう…。

だが、一体どう返せばいい？　たのむ、たのむから、ヨーモアの神様よ、いまだけでいい。

いまだけでいいから、どうかおれのもとへ舞い降りてくれ…！

これが匠の正直な感想だった。

もちろん、わらいの神様が早々に舞い降りるはずもなく、匠は、だまりこんだままだった。

「君は、早くおうちへかえりなさい」

少女は、匠の反応に特別、機嫌を損ねたわけでもないらしく、諭す
ように優しく言った。

「あなたは？」

「わたしは、案山子を喰い止める」

食い止めるって、どうやって？　かかしつてこの不可解な現象のこ
とか…？

聞きたいことは山ほどあったが、とりあえず、匠は目的のゲームを
買いに行こうとした。

木のそばを離れ、噴水がある広場の中央にでる。

ここで驚くべきことが明らかになつた。

なんと、多数の人形が広場に陳列してあるのだ！

その人形は一体一体、多種多様の服を着せられていた。あるものは、
学生服。また、あるものは、通勤用のスーツ一式となかなかの品揃
えである。

バーゲンセールでもやっているのだろうか、でも、こんなのがさつき
はなかつたよな？

一連の疑問は、人形たちに近づいた時にあつさり解けた。

これらは人形ではない。人だった。たくさんのひとのあつまりだ
った。

不自然な格好をしたまま静止したそれは、生気がなく、まるで微動
だにしない。

たしか、このような光景を本で読んだことがある。

一人のロボットに改造されたおとこが、町に出てみると、行きかう
人々が死んだように動かなくなっていたという話だ。

彼は、サイボーグになっていたため、一人だけテロの被害にあわず、

動けまわれたという。人々が動かなくなつた原因は、上空から散布された麻酔剤にあつた。

それと同じようなことが今、現実に起きているといつうのかー？
だとしたら、ゲームを買いに行くどころではない。即刻、家に帰らなければ！

匠が行動するよりも早く、次の現象が起こりつつあつた。
足もとに魔法陣のような、奇怪な紋章が刻み込まれる。
それは火の線で描かれていて、真暗だつた広場に、キャンプファイ
ヤーにも似た、まぶしい灯りが周囲を包みこんだ。

「なんだ！？」

あたりには火の粉が舞い、もう逃げるどころではなくなつてゐる。
必死に逃げ道を探そうとしたが、火の道みちが邪魔をして、なかなか広
場の外へ出ることができない。

(……もう、おわりだ、…)

そう、匠は理解した。たぶん、自分達は悪質のテロに巻き込まれ
たのだろう。

言つてしまつことは簡単だつたが、それでも、なかなか納得するこ
とができない。

おとなしく家にいればこんなことにはならなかつたのだろうか、と
考えたが、この規模の大きさでは、どこにいても同じことだらう。
そう自分を思い込ませて、匠は目を閉じた。

決して、安らかとは言えない最期。

麻酔銃で眠つてさえいれば、決して気づかされることのなかつた最

後。

せめて、それを実感できたことを神に感謝しよう。
それでは……、さよなら、ら……

「君は、まだこんなところへいたのか」

「へ……？」

この世に別れを告げようとした矢先、思わず人物がいることをすっかり忘れていた。

「案山子は、わたしが喰いとめた。もつだいじょうぶだ」

少女はさも当然の如くそういった。

まるで、今までおびえていて、田も開けられなかつた子供に、お化け屋敷から出たことを知らせてあげたかのよつこ。これが、進藤匠しんどうたくみと千影ちかげの最初の出会いだつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7413f/>

黒竜の雛

2010年11月30日03時26分発行